郡市医師会だより

「竹田市は10年後の日本のモデル？」

竹田市医師会
工　藤　博　司

竹田市は人口が約2万4千人で，小さな街ですが特筆すべきは高齢化率が42.7％であることです。日本全体の高齢化率が25％程度で世界一の長寿国ですので大げさに言うと竹田市は世界一に近い高齢化率の街なのかもしれません。ここまで高齢化率が高くなると，地元で歩道を歩く人は「くる人，くる人，皆高齢者しかいない」という印象です。一方，日本の健康寿命は男性で約9年，女性で13年平均寿命より短く，この「健康でない期間」が莫大な医療費を発生しうることを考えると，健康寿命の延伸は喫緊の課題ともいえます。

竹田市の高齢化の状況は10年後の日本の状態を一足先に表現しているかもしれません。とにかく高齢者が多いので，認知症やフレイル人口も一気に増加しかねません。「フレイル」とは「加齢とともに心身の活力（例えば筋力や認知機能など）が低下し，生活機能障害，要介護状態，そして死亡などの危険性が高くなった状態」のことですが，竹田市では「多職種連携・地域包括ケアの推進」をコンセプトに在宅医療推進協議会を結成しています。医療機関はもちろん，行政（市役所だけでなく保健所も参画）・訪問看護ステーション・地域リハビリテーション支援センターの各職員，ケアマネージャー，警察・消防署などの協力を頂き介護検討部会などの数々の会合が繰り返し行われ，活発な討論が行われています。さらに決定事項を確実に実行するので各地域の高齢者を中心としたサポートシステムが完成しつつある印象を受けています。介護の担い手の平均年齢も比較的高いので時に高齢者が高齢者を介護している・・・という状況もありえますが，介護者が高齢といえどもできる範囲での介護活動に参加し「年をとったがいまだに自分は社会の中で必要とされている」と感じることも，その人のADLの維持，フレイルの予防や認知症発症の予防にもつながる（すなわち要介護人口の新規増加を抑制する）のではと思います。

また，上記のようなフレイル・認知症対策だけでなく生活習慣病予防講座（例：メタボ対策など）を定期的に行うなど，一丸となって住民の生活習慣病管理にも取り組んでいます。

話は変わりますが二次救急医療体制が竹田市でも平成28年4月より再開され，より充実した医療が供給できるようになります。しかし，高齢者が多いため病院への需要が非常に大きく，医師が少なすぎます。巡回診療も行われていますが，医師の数が少ない為ごく限られた地域しかできていません。竹田市のように医師が極めて少ない状況の地区は全国に数え切れないくらいあるはずです。私見となりますが，すべての医師の臨床後期研修にこのような地区の病院で1～2年の勤務を必修化したカリキュラムがあれば地方の医師不足の問題は減ってくるのではと考えます。この場を借りて，日本全国の各教育機関に対策のお願いを発信できればと思います。

郡市医師会だより

豊後大野市医師会だより

豊後大野市医師会
筑　波　貴与根

豊後大野市は県南部に位置し，北は大分市南部と接し南は宮崎県境と接しております。面積は比較的広いのですがその多くが山林と丘陵地です。基幹産業は農業で，温泉もなく観光にも乏しい町です。人口は38,000人でうち65歳以上は15,000人で約40％を占めます。高齢化は急速に進み人口も自然減が進行中です。

豊後大野市医師会の会員は60名ほどでうちＡ会員は半数の30名ほどです。親子二代にわたる開業医の先生も数多くいらっしゃいます。医師会理事は10名で構成され医師会活動に積極的に参加されております。

まず，昨年より開催の地域医療構想委員会についてです。竹田市と併せた豊肥地区の人口自然減の現実と，以前から隣接する大分市への流出も多くみられる事から，急性期ベッド数の削減は仕方ないのかと思います（病院や有床診療所を経営する先生方すみません！）。今後会議が重ねられ，より良い方向に結論が導かれるものと思います。

次に，豊後大野市医師会が竹田市医師会と共同で運営している豊西准看護学院のことです。学院は両市の中間の緒方町にあり，一学年数が22名の小規模な准看護師養成学校ですが，この豊肥地域の両医師会にとっては医療の担い手の育成機関として，なくてはならない存在です。築50年を超える木造の校舎は地域に溶け込み趣きもありますが，老朽化もかなり進行しており，この地で熱意をもって学ぶ学生達の事を考えると，施設の充実のため建て替えは必然の状態です。竹田市医師会と協議を重ね，こちらもよりよい方向にぜひ実現したいものです。

理事会全体の活動として，竹田市医師会理事との交流会を始め，豊後大野市市役所幹部との意見交換会，また豊後大野市の基幹病院である市民病院勤務医の先生方との交流会をそれぞれ年一回開催しております。お互いが顔を合わせ，意見を交換することでよりよい問題解決が図られているものと思います。

個人的なことですが，今年の年賀状のイラスト選びは，サルがザボンを浮かべた温泉で気持ちよさそうな絵を見て即決しました。開業して20年が経ち年齢も50半ばになると，新鮮味が少なく微温湯につかってる自分にぴったりかと思ったからです。現状を打開すべく一昨年より週一回大分市内の病院の外来を担当させていただいております。勤務医として働くとこれまでの足りない部分も見え，日々研鑽ができ勤務先の先生方には大変感謝しております。

最後に，開業以前の大分大学外科勤務医の頃は，県内各地の関連病院に常勤，非常勤，宿直などお世話になりました。多くの先生方と出会いその先生方が今でも医師会活動の第一線で活躍されており，自分もその一助が出来ればと思っています。

郡市医師会だより

『海と山と食彩のまち』

佐伯市医師会
島　村　康一郎

「佐伯の殿様浦で持つ」海の幸に恵まれ年間300種を超える魚介類が水揚げされ，これら食材を使用した「世界一佐伯寿司」は国内外に有名です。ヒラメ，メバルの養殖は日本一，ブリやヒラマサも有数です。平成27年3月には宮崎方面への高速道も全線開通し伊勢海老街道と銘打った隣県との交流も盛んになって来ました。高速を降り最初の信号機で停車すると正面の山腹から「海と山と食彩のまち」の標語が目に入ってきます。そこには5年前佐伯ロータリークラブが創立50周年記念事業として市花の山桜やいちょう，金木犀3,210本を植林しました。同クラブには小寺会長を初め8名の医師会員が所属しており，医療プラスαの地域貢献を日々心掛けています。

佐伯市医師会は明治38年に発足して以来110周年を迎えました。現在曽根勝副会長中心に医師会史を編纂中ですが，古参の先生からお聞きしたところによると忘年会にしても津々浦々から泊りがけで集まり夜を徹して盛り上がっていたとのこと。現在もその流れは受け継がれており親睦行事は盛んです。毎月恒例で484回を数えるゴルフコンペや，春の医科・歯科・薬剤の三師会合同コンペ，32年続いている夏の三師会＋南海医療センター4チームリーグ戦によるソフトボール大会，秋の還暦・古希・喜寿・米寿を祝う長寿の会，著明音楽家を呼んでのコンサート，冬の忘年会・新年会など担当理事の上尾大輔先生が中心となって会員相互のコミュニケーションを図っています。

ここで少し小寺隆会長のことを紹介させて頂きます。平成9年に第17代会長に就任されて以来精力的に医師会を牽引されています。多忙の中ロータリークラブ会長や県教育委員長などを歴任され，4年前にはその功績が評価され「文部科学大臣表彰」を受賞されました。また今般郷土力士である関脇嘉風関の後援会長として「大相撲佐伯場所」をマネジメントし，会場満席の大入りで嘉風関自身と佐伯市民を大いに元気にしたと評判です。自院の佐伯中央病院は40周年，女子ソフトボール部は県でも優勝する程の常勝チームとなっています。

佐伯市医師会は昭和39年より佐伯准看護学院を開校し，昭和58年より健診事業，平成5年より訪問看護ステーション，平成9年より大分県南地域産業保健センター，平成11年より居宅介護支援事業所を設置し運営しています。佐伯市の人口がここ10年間で約8万5千人から7万6千人に減少する中，准看護学院の老朽化や生徒数の減少，居宅介護や訪問看護の利用者数減と近々に対応しなければならない案件が迫っています。南海トラフ巨大地震に対する災害対策も急がれ，小寺会長を中心に会員一致協力して解決の道を探っていきたいと考えています。井上雅公県常任理事が県医師会報に寄せた言葉「医師会から享受することばかり期待するのではなく，医師会に対し自分自身何が出来るのかを考えよう」を座右の銘にして。

郡市医師会だより

大分東医師会について

大分東医師会
三　好　　和

会員の先生には日頃より大変お世話になっております。私は，久留米大学眼科学教室に15年程在籍後，7年前に内科医の父が開院していた内科医院に眼科を併設し，同時に大分東医師会に入会した三好眼科内科医院院長の三好和と申します。大分東医師会及び大分市連合医師会の監事を今年で6年程務めさせていただいています。今回，原稿の依頼が大分東医師会の先輩である県医師会会報編集委員長の谷村秀行先生よりございました。頑張って紹介したいと思います。

大分東医師会は大分市の東部地区（大在・坂ノ市・佐賀関）が範囲であり，現在会員数86名の比較的小規模な医師会です。大分市は3つの医師会が存在しており，以前は大分市行政との窓口がそれぞれの医師会ごとでしたが，6年程前より大分市連合医師会が発足され，窓口が一つになり，行政からの要請・意見や各医師会からの要望・意見などを，連合医師会の理事会で議論できるようになりました。このことは小規模な東医師会にとって，理事会や医師会活動の活性化につながっていると感じております。

医師会活動は，月1回の理事会，年1回の定時社員総会の他，恒例行事(夏の納涼会・冬のフグ例会)，学術集会として大分東研究会（坂乃井旅館にて）・大分東臨床懇話会（大分医療センターにて）をそれぞれ年10回程行っています。恒例行事では会員の親睦だけでなく，お互いの顔の見える診療所間の連携・病診連携に役立っております。また，会員の皆さんは勉強熱心であり，殆どの学術集会も多数出席されております。先日私も出席しました大分医療センター・医師会合同臨床研究会では，大分医療センターの職員・大分東医師会を中心とした医師・消防署の救急隊ら100人以上が出席され，演題は大分医療センター呼吸器外科部長の高性能の内視鏡手術装置「ダ･ヴィンチ」を使用した治療の動画を交えた講演，もう一つは救急隊の活動内容及び現状の講演がありました。「ダ･ヴィンチ」の操作性能・先生の手技の素晴らしさに驚かされました。今のところ「ダ･ヴィンチ」を操作できる先生は数少ないそうです。救急隊員の講演では日頃聞けない救急隊の現状や本音が聞けて，出席者の質問も多く大変興味深かったです。講演後の懇親会ではテーブル席でしたが，皆さん立食パーティかのように懇親を深めておられました。

このような講演会を通して，他職種の方とも連携が円滑に取れればと考えております。

今後も三宅勝会長を中心とした医師会活動を通して，会員間で連携を円滑にし，行政とも連携をとり，地域住民のためになる在宅医療・地域医療ができるように努力していければと考えております。これからもご指導・ご鞭撻の程何卒よろしくお願いいたします。

郡市医師会だより

大分郡市医師会の中の由布市とは？

大分郡市医師会
岩　男　裕二郎

大分郡市医師会は，大分市の旧大分市外である稙田，大南，明野，鶴崎地区と旧大分郡，今の野津原地区と由布市で構成される変則的な医師会です。行政区としては2市に跨り，大分市との折衝は大分市連合医師会で，由布市との折衝は由布市地区医師会として対応しています。由布市地区医師会は大分郡市医師会の副会長が会長代行をすることが暗黙の了解となっており，長年日野修一郎先生に牽引して頂きましたが，昨年から私にお鉢が回ってきました。今年，由布市は合併10周年を迎えました。この10年間の由布市地区医師会の活動を幾つか御報告させていただきます。

まず，特定健診の個別健診の推進を行いました。旧湯布院町では平成11年からかかりつけ医健診を開始し，そのノウハウを由布市全域に拡げました。眼底検査のため各病医院で眼底カメラの購入，リースが必要でしたが，喧々囂々の議論の末，全医師会員が賛同し，合併の翌年から始まりました。平成25年には全県で由布市のみが健診率65%を達成，しかも個別健診が6割強と成果を上げています。

次に大規模災害訓練。列車事故で50人前後の被災者が発生したと想定し，湯布院，挾間，庄内で3回行いました，行政，警察，自衛隊は勿論の事，住民を巻き込んだ訓練を目指しました。患者役で地域住民，大分大学医学部の学生さんに参加して頂き，凝りに凝った患者プロフィールに沿って演技指導，メイクまで行いました。現場でのトリアージ，搬送時間，救急車到着医療機関での2次トリアージまでを検討し，大規模災害時に一番大事なのは本部機能と通信手段の一元化でした。また，各班で異業種の人間がひざ詰め談義を何回も行い，顔見知りになり，町で会っても挨拶ができる関係を構築できたのが大きな収穫でした。

最後に「由布物忘れネットワーク」の設立，早期のオレンジドクター制度への取り組みです。現在の大分県オレンジドクター制度は由布市をモデルケースとして作られたものと自負しています。大分大学医学部の認知症専門医の指導，助言をもとにかかりつけ医，福祉，地域住民，行政が有機的に連携し，認知症患者及び家族を地域で支えるシステム構築を図り，研修会，症例検討会を定期的に行いました。医者だけではなく，ケアマネジャー，ヘルパーさん，福祉施設関係者が同じ目線に立って学び行動をする基礎が出来上がりました。今でも認知症カフェの開催，認知症患者徘徊訓練を挾間町，湯布院町で2回今年度は行い，不断の活動を続けています。

大分郡市医師会の総務部会，理事会でも由布市の理事は時には大声で，時には朗々と持論を語り，ともすれば安寧な会議に良い意味で水を差すことが多いようです。熱意とバイタリティはすごいとお褒めの言葉を釘宮誠司会長からもいただいております。

在宅医療連携拠点体制整備事業や地域医療構想調整会議等，これからの医療は地域の需要にあった医療をその地域で策定し，医療機関が連携して提供しなければ成立しなくなるようです。今後も大分郡市医師会をバックボーンとして由布市地区医師会員は協議を重ねよりよい地域医療を提供できるようにと思っています。

郡市医師会だより

『介護，医療の連携とキーパーソン』

速見郡杵築市医師会
佐　藤　素　生

速見郡杵築市医師会の地域の人口は約6万人で，高齢化率は29.6％（1年前28.6％）の県平均に対し，杵築市は34.4％（33.7％），日出町は27.8％（26.8％）と毎年着実に高齢化が進んでいます。このため当地でも介護と医療の連携等が大きな問題となっており，高齢者が望む「住み慣れた街に安心して末永く暮らしたい」というテーマに向けての模索がさかんに行われています。しかし，実際にこれら介護や医療をどの地域でどのように利用するのかを決定するのは高齢者の家族のキーパーソンであることが多く，このキーパーソンの意向により介護と医療の連携も大きく影響を受けるのが現実です。

私事になりますが，今年の夏，悪性腫瘍で余命1年と宣告された叔母が，宣告から1年5ヶ月で亡くなりました。1年2ヶ月は症状もなく平穏な日常を送り，体調が悪化した最後の3ヶ月は在宅でのホスピスケアのみ受けました。生前からの望み通り，住み慣れた街で関わりを許可した者のみに囲まれ，旅立っていきました。叔母は生前のことから亡くなった後の家族葬，お墓や戒名は不要などということまで，事細かに紙に記しておりました。子供がいないため私がキーパーソンとなり，いろいろな事柄に対処してきました。手術はしない，検査治療も必要なもの以外はしないという叔母の意志に沿った対処となりました。医療と介護については，もっといい方法があるのではないかという思いに何度も駆られましたが，本人の望むとおりの最期となり，家族としては満足いたしました。ただ，家族といえどもいろいろな意見があり，死後のお墓や戒名はすべて本人の希望通りとはいきませんでした。

介護が必要となった高齢者の介護や医療の決定において，住み慣れた街に暮らしたいという高齢者の意思どおりにすることは簡単ではありません。本人の意思に反して，家族の希望により施設や住む町が決定されることが頻繁にみられます。住む場所にとどまらず，治療の方針も家族が決定しているのが現状ではないでしょうか。先日，98歳の高齢者のキーパーソンが，自身も高齢者である長男から次男に変わったとたん，治療薬はすべて中止してほしいと申し出がありました。子達も高齢が進む中で，先の見えない親の介護の負担に困惑しているようでもありました。現在の投薬は最低限必要な治療薬である事を説明して納得してもらいましたが，超高齢者の治療は本人の意思とは関係なく決定されることが多く，さらに家族の中でも意見が異なります。幼児虐待やネグレクトはその保護者から受ける場合が多く，周囲が介入しにくい面もありますが，生命の危険が危惧される場合もあり，阻止すべきことであると社会的に認識されています。家族だからといって他人の生命を決定できるとは考えられていません。それに対して，高齢者や認知症老人においてはどうなのでしょうか。

終末期前からの個人の意思に沿ってその人の一生を終えることができるようにするために，医療や介護はどのように介入していくべきでしょうか。意思決定が困難な高齢者の場合，まずはキーパーソンが家族の意見を集約し，代表となる事が必要です。そして介護と医療が連携して高齢者の生活を決定していく場に，キーパーソンだけでなく，地域の関わりのある人，行政等も関与していくことが必要になってくるであろうと思います。

郡市医師会だより

「開業医の婚活」

国東市医師会
菅　　淳一

今年の夏も，夜8時に満潮となる大潮の日（7月31日）に勇壮な川舟祭が国東市安岐町の河口周辺で行われた。近くの住吉神社の夏祭りとして海上安全・大漁・商売繁盛等を祈願して行われるようになったとして伝えられている。神輿の川舟神幸（ご神体が他所へ赴く事）として引き舟に引かれて河口を遡上して来る。お供をする「篝火船（かがりびぶね)」の上で若者達が動き回っている。中央に設けられた篝火に油が注ぎ込まれると一気に火勢は上がり，熱さに堪らず若者達は海に飛び込んでいく。これは厄を焼き払い体を清める意味があるといわれている。暗闇の中，「コンチキチン」のお囃子の音色とともに大きな水音が耳に飛び込んでくる。夏の暑さを吹き飛ばす「元気」を頂く若者のお祭りである。

ただ，そのお祭りの中心となる若者達の平均年齢も30台を超え後継者不足に心配が残っている。ご他聞に漏れず国東市は大分県の中でも高齢化と人口減少が深刻な地域である。平成2年には23.9％であった高齢化率が平成22年には36.4％と12.5％も上昇。人口は37,771人から，今年30,123人と約7,600人減少している。国東市は若者の定着と出生率向上を目指してあの手この手を模索している。去ってゆく事が決まっているソニー工場のあとの企業誘致，新規産業の開拓。県外からのI－ターン。さらに若者同士の出会いから結婚，そして子供の誕生による人口増を目指した「婚活」イベントが企画されている。残念ながら，大きな成果はまだ耳にしていない。

このような高齢化は国東市医師会の会員の中でも見られる現象である。現在41名の医師会員は国東市民病院やあおぞら病院に勤務の先生方の増減を除くと高齢化，減少が続いている。ここ10年の間に数件の医院が閉院されている。医師の高齢化，人口減少による経営困難，後継者不在が考えられる要因であり，なかなか改善困難な要因でもある。新規開業の先生も極僅かで，今後の減少に歯止めをかけるのは大きなエネルギーを必要としている。開業医も今後は「婚活」イベントを企画しなければなるまい。

このような時期に地域医療構想が検討されている。当医師会は別府市医師会，速見郡杵築市医師会とともに東部医療圏に組み込まれている。2014年7月1日現在の総病床数4,451床の医療機能別分類が今後行われようとしているが，果たして国東市医師会管内では何床が生き残るのだろうか。さらに回復期，慢性期を分担するであろう医師会員のベッド数が果たして何床となるのか，不安な思いで地域医療構想担当理事連絡協議会に参加している。リードしてゆく役員は，暗闇の海に飛び込む気迫が求められている。

郡市医師会だより

胃がん予防・早期発見に向けて
「豊後高田市ピロリ菌除菌プロジェクト」

豊後高田市医師会
藤　岡　利　生

豊後高田市医師会は，豊後高田市の重点施策である「人口3万人構想」に積極的に取り組む姿勢で健康推進プロジェクトを実施しています。その中で，市民の皆様に健康で長生きして頂くことを重点施策として“健康なまちづくり”を目指した企画の一つに，今回実施したピロリ菌除菌プロジェクトがあります。

豊後高田市では，県内の他の市町村と比較して壮年期の死亡が多く，その原因として最も多いのが胃がんです。これまでの豊後高田市は，がん対策として国の指針に基づき，通常の対策型胃がん検診を実施していました。しかし，他の市町村と同様に受診率は低迷し胃がん予防・早期発見対策としては大変困った状況であります。

そこで，豊後高田市医師会としては豊後高田市および関連の健診センターとの協議により，胃がん発生の最も重要な原因である胃内のピロリ菌感染対策を推進することとしました。

今回実施したピロリ菌除菌プロジェクトでは，豊後高田市のこれまでの胃がん検診と比較して受診者数が増加し，胃がんの発見数がこれまでの7.1倍と著しく増加しました。今回の企画がピロリ菌感染者を対象として，血清抗ピロリ菌抗体陽性者に対して胃内視鏡検査を実施したことが良い結果につながったと考えています。さらに，行政による積極的なプロジェクトの立ち上げと正しい知識の普及啓発に加えて地域の医師会および検診機関の熱意と共に，より厳密な抗ピロリ菌抗体価の判定基準を用いたことがその要因としてあげられます。特筆すべきことは，発見された胃がんの90％が早期胃がんであった事実です。

世界保健機関（WHO）の専門組織，「国際がん研究機関（ＩＡＲＣ，本部フランス）」は2014年9月に，ピロリ菌の除菌治療で胃がんの発症を3～4割減らせるとの報告書を発表し，国内事情に応じて，除菌治療による胃がん予防対策を検討するよう各国に求めています。今回のプロジェクトでは，最も高い胃がんのリスク因子と考えられているピロリ菌陽生の萎縮性胃炎に対して積極的に除菌治療を行い，その後の経過を観察する体制が整えられました。今後の胃がん発生の予防および早期発見に大きな意義があるものと思われます。また，ピロリ菌陰性の方は，国の指針による対策型胃がん検診を受けることが重要です。

今後はより若い年齢層にピロリ菌除菌プロジェクトに参加していただくことにより，胃がんによる壮年期死亡を減少させることが期待されます。将来は，学校検診と連携した形で出来る限り若い年齢層での除菌治療が望まれます。

最後に，本プロジェクトにご協力頂きました近隣の医師会の先生方各位に心からお礼申し上げます。

郡市医師会だより

臼杵市医師会に入会して

臼杵市医師会
下　田　勝　広

昨年4月に臼杵市医師会立コスモス病院に赴任し臼杵市医師会会員とならせていただきました。今後ともよろしくお願いいたします。臼杵で驚いたことは3つ。「プロジェクトＺ」「絵になる街」「絶品フグ」

まずは「プロジェクトＺ」と名づけられた在宅医療連携拠点事業のすばらしさです。何も知らずこの会合に初めて出席したときには衝撃的でした。医師会の先生方はもちろんのこと歯科医，薬剤師，臼杵市職員，中部保健所，各介護支援，訪看，ヘルパー，消防，医療・介護に関連するありとあらゆる職種の方々が，活き活きした顔で時間を気にすることもなく臼杵のこれからの医療・介護について熱く語る姿はこれまで経験したことがない異次元の世界でした。わけが分からぬうちに臼杵消防署で開催された臼杵市地域リーダー研修会で講師として指名され，良く理解もしていないのに周りの雰囲気にのせられて地域医療を語る怪しげな自分がいたり，形だけ受講して取得したオレンジドクターだったのに担当理事の先生の熱意に触発されて認知症の地域研修会に出席したりですっかり外科医から地域医療医になった自分に驚きさえ感じます。市長さんに初めてお目にかかった時には大変緊張しましたが，最近ではよくお会いし当初のような緊張感もなくお話が出来るようになりました。土曜日に開催されている臼杵の魚市場で副市長さんや市の幹部の方とばったり出会ったときには驚きでした。顔が見える関係とはこのことでしょう。どこのイベント会場，催しにでかけても知り合いに出会いまさに地域に密着しております。これと同時に進められている「うすき石仏ねっと」という仕組み。これがまた大分県内でも屈指のICT環境で県外からの視察も多く臼杵に赴任する前に全く知らなかったことが不思議なくらいです。消防署（救急隊）や行政を含めた医療・介護に携わる機関をネットで結びつけ患者さんの情報を共有し，効率よく良質な医療・介護・福祉を展開するためのネット環境の整備です。臼杵市約4万人の市民のうちですでに7千人が石仏カードという個人情報アクセスカードを保有しており，高齢者に占める保有率はかなり高くなっています。

二番目は，すばらしい景色がいたるところにあり，町自体も大変落ちついた歴史の街です。私の趣味の絵の題材には事欠かなく大変嬉しい限りです。

三番目のフグは言うまでもありません。フグを食べながらの医師会の会合は話も弾み和やかな雰囲気の中，心地よいひと時です。

さて，大分市に隣接した臼杵の地域中核病院，二次救急病院であるコスモス病院ですが，ご他聞にもれず地域医療を担う医師や看護師の慢性的な不足に陥っており，「明けぬ夜はない」と自分に言い聞かせ，職員とともに頑張っております。早く地域医療を担う人材が十分補充され医師会の先生方と密に連携し，地域の方々がさらに安心して満足できる医療・介護が提供できればと願っております。

郡市医師会だより

東北大震災で被災した植田俊郎氏について
～～備えは十分か～～

津久見市医師会
副会長　大　石　省一郎

医科大学時代の同級生植田俊郎氏が平成23年3月に起きた東北大震災で津波を受け被災した。

彼とは入学後，解剖学の実習も同じグループで同じ参考書を買い，夜遅くまで共に実習に取り組んでいたのを覚えている。

彼は登山が好きで実習の休憩時間によく登山家の植村直己さん，今井通子さんの話しをしていたが野球好きの私にはあまり興味がなかった。のちに彼は山岳部のキャプテンを務めた。

大学6年の5月の連休に北陸の白山連峰へ岩魚を釣りながら登ろうという話になった。遠くから見ると白山連峰はまだ冠雪を見ることができる。麓まで車で行き，二人分の食料と夜営のためのテントを背負い登り始めた。私も体力には自信があったが，沢や断崖を登りながら進むのは大変だった。途中，彼が岩魚を数匹釣り，夜はそれを骨酒にして飲んだ。次の日さらに登り，雪渓のあたりまで登ると，山から天秤を担いで下ってくる山師に出くわした。何が入っているのかと覗くと何と岩魚が数匹桶の中ですばしっこく泳いでいた。九州育ちの私にとって岩魚は初めての体験であった。幸い熊にも遭遇せず無事に下山できたが運動靴で登ったため両母趾は黒爪となった。

大学を卒業してそれぞれ実家に戻り音信がなかった。彼は岩手県大槌町に診療所を開いている。子供のころに人気のあったひょっこりひょうたん島の浮かぶ，リアス式海岸の奥に位置し，海岸からほど近い場所に開業していると聞いていた。平成23年3月11日，テレビが津波の映像を映し出していた。破壊力は凄まじいものであった。ふと彼のことが頭をよぎった。被災しているのではないか気になったが，混乱で情報が錯綜しており安否確認に時間を要した。毎晩遅くまでインターネットで生存者名簿を食い入るように探した。「あった！無事だった！」近くの弓道場に避難していることがわかった。

彼の手記より抜粋

患者さんの血圧を測っているときに地震が起こった。これまでに体験したことのない長く大きな揺れだった。「いつもとは違うね。」と患者さんに声をかけ，患者さんと職員に帰宅を促した。「まさか…。」と思いながら階段を上った。その途中自宅4階の窓から見た景色はまさに忽然と海の中に立っている我が医院であった。黒い波が渦を巻き，家が沖へ流れていく光景は悪夢のようであった。そして第二波と思われる黒い帯状の波が押し寄せてきたときに母がつぶやいた，「私達だめかもしれない…。」

後日連絡を取った。懐かしい彼の声が電話口から聞かれ元気な様子が伺いしれた。今年新しい診療所が建つので心配しないでくれ，と言っていた。大変な思いをされたと思う。早く復興してほしい。

表紙の写真は植田俊郎氏が撮影したものです。山岳部で培った彼の的確な状況判断と忍耐力が40年近くたった今でも健在であったことは私にとって誇りであり，今更ながら感銘を受けている。

我が町もリアス式海岸にあり，いつ津波が襲ってくるかもしれない。備えを十分にしておかなければならない。

郡市医師会だより

在宅医療と他(多)職種連携

中津市医師会
理事　古　川　信　房

在宅医療への強力なシフトが推進される中，医師会としてもその流れに対応していかなくてはなりません。従来の診療所の入院施設にも「良さ」があったのですが，ほかの地域と同様に現在では中津市でも診療所のほとんどの先生方が病棟を廃止，または休止している状態です。また，超高齢化社会の我が国においては在宅医療の重要な担い手である家族のマンパワー不足も深刻で，家族構成の変化に伴う独居世帯，老々世帯の増加を鑑みると，声高に在宅医療の充実を叫ばれても，現実にはなかなかそれが患者さんの生活しづらさを改善する役に立っているとは思えません。しかし，流れに逆らうことは出来ませんので，今後は医療が中心で医療機関同士の「医療連携」から，在宅で本人が安心して生活できる環境，介護者にも余裕がある介護環境の実現のため，医療，介護を含めた地域での「生活支援連携」を推進していく必要性が高まってくると思われます。在宅医療を支える中心的役割を果たすのは地域のかかりつけ医です。現在の中津市医師会の会員構成を見ますと病院：11，診療所：61(うち有床診療所17施設)で医師会員数　156名です。内訳を見ますと管理者　67名：平均年齢63歳，勤務医　89名：55歳でこちらも待ったなしの高齢化が進んでおり，新規開業もほとんど見られない，県北地域においてそう遠くない将来，適切な医療サービスの提供，地域医療運営にも大きな影響を及ぼすことは間違いありません。また今後は，在宅生活でのキーパーソンは生活支援相談員，いわゆるケアマネージャーになって来ることが予想されます。すなわちケアマネを中心に，医療，介護，福祉，行政，地域がその人の暮らしを支える「生活支援連携」が中心となると思われます。中津市医師会としては2025年に向けて勧められている「地域包括ケアシステム」への積極的な関わりが求められるなか，私たちの地域の特性に見合った形での貢献を進めています。たとえば地域ケア会議への出席などを通して効率的な介護，医療サービスの提供体制の構築に関与する。医師会主催での他職種での症例検討において，顔の見える関係作り，介護福祉職員を含めた地域全体のスキルアップに尽力する。そして，それぞれの専門性と協働し，職種間での関係性が対等であることを再認識し，個々でその専門性の自己研鑽を行い，また互いの専門性を尊重することに重きをおいています。地域包括ケアシステムのなかで，今，私たち医師会会員，それぞれが自分として何ができるかを考えていく時が来ていると思われます。

郡市医師会だより

別府市医師会の活動状況

別府市医師会
理事　平　井　良　昌

陽春の候，県医師会，各郡市医師会の先生方にはいかがお過ごしでしょうか。平成25年4月に別府市医師会が「一般社団法人」となってから2年が過ぎました。河野幸治会長の下，医師会の諸活動も活発に行われており，その近況についてご報告いたします。

平成26年8月2日(土)，3日(日)には「第46回九州地区医師会立共同利用施設連絡協議会」をビーコンプラザ(別府市)において開催しました。日本医師会会長の横倉義武先生の特別講演をはじめ各分科会，シンポジウムに九州各地から700名を超える参加者が集い，盛会のうちに終えることができました。県医師会，各郡市医師会の皆様にも深く感謝申し上げます。

平成27年8月22日(土)，23日(日)の両日，「第46回中四九地区医師会看護学校協議会」をビーコンプラザにて開催する予定です。テーマを「育てよう！地域で活躍する看護職を～学校と臨床をつなぐ教育，つなげる教育～」とし，いま看護学校が抱えている多くの問題点を持ち寄り，日本医師会医療職担当理事や厚生労働省看護課長を交えて協議したいと思っています。担当の金馬常任理事を中心に別府市医師会の役員，教職員一丸となって頑張っていますので，県医師会，各郡市医師会の皆様のご支援，ご協力，並びにご参加の程，よろしくお願いいたします。

また本年は介護報酬が改定され，9年ぶりの引き下げとなります。平成30年の診療報酬との同時改定，地域包括ケアシステムの構築に向けての新しい医療提供体制・保険制度の導入などもあり，医療，介護にとってさらに厳しい状況となることが予想されます。

在宅医療に関する連携は，医師会が中心となってそれぞれの地域にあった仕組みを作ることが重要です。別府市医師会では担当の渡部常任理事を中心に「ゆけむり医療ネット」のSNS機能を拡充することで現場と各医療機関との情報交換を速やかにし，在宅医療の推進に役立てていこうと考えています。今後導入されるマイナンバー制にも対応できるよう国や地方自治体とも協力しながら「ゆけむり医療ネット」をますます充実したものにして行きたいと思っています。

県医師会，各郡市医師会の先生方には，別府市医師会に対しまして今後もこれまで以上にご指導，ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。